

物一つを賜ふ。但し木村の子孫なし。といへり。横山家士櫻井朝香曰、木村權兵衛子孫無之旨、三州志註記之。蓋不穿擊乎。木村權兵衛者藩士木村權三郎之祖也。權三郎之家譜可追考云々。

○横山氏家士塚本猪右衛門傳

元和二年武功書に云ふ。三百石塚本猪右衛門、大納言様御代奥村讚岐守取次を以、二十人罷出處、我等と篠原左門御馬廻に被召置、孫四郎様へ被遣。奥村金左衛門若黨不届仕合有之、申付候へ共、さとり候て不罷出を、我等成敗仕候。又大聖寺御攻被成に付、惣構を乗込、二之構堀際柵へ着處、手負死人多く出來、城より突出る處悉く崩る。我等一人居殘、弓を持參、矢數射有之處に、伊藤縫殿助返し參り、我等手を負引退申處へ、佐治甚兵衛、木村無手右衛門も返し參候。縫殿助于今有之存知候。其後惣人數かゝり、本丸外之二の間の内に、木村無手右衛門・森岡隼人居申候。櫓より鐵炮・弓に而射出、無手右衛門鐵炮一切打不申候。我等取候て二人打倒候。右兩人能々存知候。夫より本丸へ乗り、石垣をつたひ、堀にて二鐘つかれ候。此儀石黒覺左衛

門可被存知候。又土藏に敵多く籠居、はいり申者無之、私等先へはいり切合、首を取罷出、御歸陣已後御加増二百五十石被下。孫四郎様御浪人以來、山城守所に居、其後安房守所に有之。去年大坂表惣構へ取詰候時、堀際迄着。我等之近所にて岡田助右衛門被居退き被申間、我等も二十間許退き候へども、口をしく有之付、各に詞を懸立歸、其時手を負候。竹田金右衛門・島木助左衛門能々存知候。惣構へ着候様子、岡田助右衛門被存候由安房守へ申候處、助右衛門討死被仕。其以後御無事に罷成、眞田丸に被居候磯野七郎右衛門殿と、山下兵庫殿・江守半兵衛殿知音に付御越候へば、我等指物を御尋被成、働之様子御咄之由承候云々と。三州志に、塚本猪右衛門、大聖寺役の頃は利政君の傳也。其の後横山山城與力と成り、其の子助進微妙公被召出、二百五十石を賜ふ。此の子孫次郎左衛門、天明四年絶炊す。

○横山氏家士杉采女傳

元和二年武功書に云ふ。五百石杉采女、大聖寺御攻被成時、鐘ヶ丸山城守者共乘破刻、我等手前働之儀、二三人之

内に堀へ着候處に、石弓にて四五間被打落、甲迄被打割候へども、重て堀を乗破り、其後本丸へ乗候て、菊池大學殿に詞をかはし、夫より廣間之前にて敵と散々切合、手を負、首を取、肥前守様へ罷出候處に、殊之外御感に預り、御陣之後山城守吟味被致、加増二百石吳被申。先年太田但馬守を山城守に被仰付刻、御馬廻世田忠兵衛と申仁召捕方、山城守迄被仰出、我等へ被申付處、彼者致覺悟、家之内より若黨二三人召連、刀を拔懸候處を、飛懸り組臥せ生捕候。門口迄御家中衆數多被越、何も見被申。手柄仕由御説被成、御本丸迄召出、淺井左馬助を以殊之外預御感。此儀御直衆何も御存知候。去年大坂表にて式部儀西之丸へ一番乗仕、則手柄之高名被仕處着居候。式部被存知候。とあり。横山家士櫻井朝香曰。杉采女軍功賞美賜物之時。銀二枚・帷子二賜之。三州志不載之。采女子孫嫡家者既斷絶。與力士杉吟左衛門家者、蓋庶家也。

○横山氏家士杉平太夫傳

元和二年武功書に云ふ。四百石杉平太夫。池田勝入内片桐半右衛門所に堪忍仕、其折節太閤様尾州小牧表御陣之刻、

池田勝入三河へ中入として罷立。其道路に岩崎と申古城を拵、尾州より持有之候處、行懸に攻破申、則首一つ討取、御感に預り候。右之後吉田修理所に在之、關東小田原等御陣之刻首一つ討取。其陣にて吉田修理跡備にて、右之城落城に及び懸付、修理家中にて不破彦太夫・我等兩人まで首取候。去年大坂表御陣岡山口にて御合戦之砌、首二つ討取候云々。とあり。

○横山氏家士平手忠左衛門傳

元和二年武功書に云ふ。三百石平手忠左衛門。去年大坂表にて手前働之儀岡山口にて敵と出合、鐘にてたゞき合突臥せ、乗掛り首を取處へ、跡より人數多參られ申候。我等も下人も手負候故、右之分に御座候。則杉平太夫も脇にて見被申候。其後安房守殿御越、右之趣申上候。と迄記載す。此の平手氏の子孫于今連綿して、其の家系は織田家の平手政秀が正統の子孫にて名家也と云ふ。太宰純の墓碑に云ふ。本姓平手。其先嘗居尾州愛智郡平手里。爲平手氏。五世祖中務大輔諱政秀。仕織田氏。爲信長傳。食祿二萬石。信長立不君。中務君驛諫弗聽。作疏自殺。信長感懼臨喪。而